死に纏わる経験と幸福観の関連について
―現代若年層に於ける宗教と死生観を切り口に―

木　村　優　里
（京都女子大学大学院研修者）

我が国では数年来、自殺が若年層に於ける死因の最も大きな割合を占めており、現代の若者が今一度「死」について考えることの重要性が高まりつつあると言える。死生学の領域においてはターミナルケアを皮切りに、死を見つめることにより生を充実させんとする考え方が採用されてきた。現在ではデス・エデュケーションの概念も徐々に一般へ広まりつつあり、教育課程に於いてこれが取り入れられる試みも散見される。しかし、既存のデス・エデュケーションによる介入プログラムは、受講者が死について考えることやそれにより命のありがたさを実感させることを目的としており、どのような「死に纏わる経験」が個人の認知的枠組みに影響を与えるかということについて明らかにした先行研究は極めて少ない。

本稿ではまず文献レビューを行い、先行研究に於いてこれまで「死生観」の要素として並列的に扱われてきた種々項目を、死を意識することの契機となる「死に纏わる経験」とその結果として個人が持つ「死のイメージ・死への態度」とに分類することで、「死に纏わる経験」が個人の「死のイメージ・死への態度」にどのような影響を与えるかについて考察した。次に「死のイメージ・死への態度」が個人の幸福観にどのように寄与するかについて明らかにすべく、インタビュー調査を実施した。インタビューでは「死に纏わる経験」のうち特に「身近な他者の死」が個人の幸福観にどのような影響を与えているかについて、死生観を切り口に分析を行った。「身近な人の死」という死に纏わる経験が宗教的信念や文化的価値観同様、個人の死生観を変容させ、その結果として幸福観に影響を与えている可能性ついて検討した。
キーワード：死生観、幸福観、宗教、死後の世界観、死に纏わる経験、メメント・モリ

はじめに

一般に、死は不吉なものとして扱われており、日常生活の中で死を語ることは好まれない。しかし、この事実には奇妙な印象をおぼえざるを得ない。現代人は将来のこと、時に何十年も先の事柄や起きるかどうかも明らかでない事態に備えて時間や労力を惜しまず活動する。それにもかかわらず、生あるものに必ず訪れることが明白であり明日訪れるかもしれない死について人は一定の年齢を超えるまで、あるいは大きな病や生死にかかわる問題を抱えるまで正面から見て考えず、語ろうとしないのである。

しかし、死について考えることがメンタルヘルスに良い影響を与えることは多くの疫学研究によって明らかにされてきた[30)39)42)]。とりわけ1980年代以降、老年期・終末期において死に目を向けることのメンタルヘルス向上効果が注目され、欧米諸国を中心として実証的研究が盛んに行われてきた[36)39)51)]。これを受け、医療の現場では患者の緩和ケアと並行して終末期の過ごしをより良いものとする機会としてのデス・エデュケーションが実践的に取り入れられつつある[37)]。一方で、デス・エデュケーションや死に向き合うことが終末期・老年期を迎えた人々以外、つまり一般層のメンタルヘルスに与える影響について明らかにした実証研究は稀少であり、死が若年層や中年層の生活・人生にどのような影響をもたらすかについては十分な検証がなされていない。

本稿では「死に纏わる経験」と経験後の死生観の関係について先行文献をレビューしながら考察

する。さらに独自に実施した質的調査の分析を行い、身近な人の死が我々現代人の死生観や幸福観にどのように影響するかについて考察することとした。

1.「死を意識すること」の効能について

死を意識することの重要性については、以前より著名な研究者たちが注目してきた。ライフサイクル論で人間の発達課題について提唱したエリクソンは、死を「すべての人間が対象となる重要なテーマである」と述べている[8]。また、死の受容のプロセスについて明らかにしたキューブラー・ロスは『死ぬ瞬間』で「人が目的のない空しい人生を送ってしまう原因の一つは死の否定であり、死を意識することによって人間は最後の段階まで成長する」（キューブラー・ロス、1969）と述べている[9]。死の準備教育を提唱したデーケンは「死が人間の創造的能力を開発する」（デーケン、1987）とし、死を多面的に捉えることの重要性について示した[3]。このように、1900年代後半以降、死を意識することは人間の成長に於ける重要な事柄として捉えられるようになり、死生についての価値観が学問として扱われるに至った。

国内の研究に於いても死を意識することの意味については考察されてきた。木村敏は「死を忘れないではっきり念頭に置くということは、いわば日常性の背後に回ってその裏側を探ってみるということであり、日常性をその自明さから引き離して問題視するということである」（木村、2012）と述べ、精神病理学的観点から“mement mori メメント・モリ”の重要性について指摘している[20]。また、井上は戦前戦後の日本に於ける死生観の変化について概観し、「生の全体から死が完全に欠落してしまうと、生そのものが平板化し、貧困化する」（井上、1973）と考察している[4]。

しかし、人が意識する死は常に均質のものではない。例えば、祖先の墓参りをするときに我々が思い出す「死」と、うつ病患者が希死念慮を抱くときの「死」は同じではないし、過去の死と未来の死は同じではない。このような点から、意識する死の様態によって個人の感情や行動に与える影響が異なると考えられる。これを踏まえ、先行研究に於いて、死がどのように取り上げられてきたかについてレビュー・整理する。

(1) 死生観尺度に関する先行研究

これまで、死生観の構造を明らかにすべく死生観尺度の作成が試みられてきた[5)16)31]。特に有名な死生観尺度として、死への恐怖・不安を尺度化した Templer の“Death Anxiety Scale”（以下 DAS）[31]や死を「死の恐怖・不安」「積極的な死の受容：私は死を永遠の幸福な場所への道だと考える」「回避的死の受容」「中立的な死の受容」の4つにカテゴリ化した Wong らの“Death Attitude Profile-revised”（以下 DAP-R）[5]がある。死生の問題は全人類に共通するが、これらのスケールで扱われている死の受容態度「死を永遠の幸福な場所への道だと考える」などはあまりにキリスト教的で、現代日本人に於ける死生観尺度としては適切でない可能性がある。

このような問題意識から、平井ら（2000）は日本に於ける DAP-R 尺度の妥当性を検証し、日本人の死生観に於ける主要なものとして「死後の世界に関すること」「死に対する恐怖や不安に関すること」「解放としての死に関すること」の3つのカテゴリを提唱した[38]。金児（1994）もまた DAP-R を基盤に、日本語版 DAP 尺度を作成した。尺度を用いた実証研究から死生観にかかわる「浄福な来世」「挫折と別離」「苦しみと孤独」「人生の試練」「未知」「虚無」の6因子を見出した[16]。

また、藤本ら（2003）は「自分の身近な死」「概念的な死」のそれぞれについて対処する能力を測る Death Competary 尺度を新たに打ち出した[40]。河合ら（1996）は高齢者を対象に計量的研究を行い、死への態度とその要因について分析した[17]。竹下ら（2001）は生と死に関する看護学生のレポートで使用された死に纏わる語を KJ 法[18]で分析した結果、「生き方」「死の受容」「死のイメージ」「生のイメージ」「否定的な死」の五つのカテゴリに分けられることを明らかにした[27]。

以上のように、死生観について要因分析を試みた研究は国内外ともに少なくない。これらの先行研究を概観すると、共通して「死への恐怖や不安」や「死後のイメージ」に関すること、「死をどの

ように捉えるか」といった問題を個人の死生観の要素として抽出している。さらに、死生観の形成には個人の属する国・地域独自の宗教的観念や文化的価値観が影響を及ぼしていることが分かる。

⑵　死生観尺度項目の再分類

個人のメメント・モリを惹起すると考えられるインパクトとしての死そのもの、あるいはその機会について分析した研究はほとんど見られない。教育機関等で実施されているデス・エデュケーションの取り組み[2)21)26)33)45)47)48)]については、死への関心を高めることや死へのタブー視を和らげること、それにより生への充実を高めることを目的としている。具体的には死一般についての講義を実施したり、そこで得られた生徒のレポートを分析したりとデス・エデュケーション自体の効果を検証しているものが多い。一方でプライベートな死そのものに纏わる経験が個人の内面にどのような変化をもたらすかということを明らかにした研究は少ない。その意味で、丹下ら（2002）は「死」という語そのもののイメージについて分析している点でオリジナルである。丹下らはKJ法により若年層の死に対する連想語を分類した。その結果、若年層の持つ死の種類が事件や事故・自殺などの具体的な死の形に関するものと、信仰・文化に根差した死のイメージ、感情反応に分類された。このうち、事件や事故自殺などの具体的な死についての連想語が最も多く集計され、若年層にとっての死のイメージが具体的な死に偏っていることが明らかとなった[29)]。これについて丹下らは「我々の日常生活において接する死が内的な原因のものである場合よりは、むしろメディアを通して報道される事故や事件の犠牲者のものである場合が圧倒的に多いことの反映である」（丹下、2002）と分析している。

ここで本稿に於いては、前項でレビューした先行研究で見出された死への態度や「死」への連想語を単に並列的な死生観の要素とせず、外部環境から与えられた「死に纏わる経験」（原因）とそれによって形成された「死のイメージや死への態度」（結果）とに階層的に分類する。前者には①「メディア等からの情報」、②「宗教や文化」、③「自分自身の死への直面」、④「身近な人の死」などが該当する。一方、後者には「死への恐怖や不安」、「肯定的あるいは否定的死の捉え方」、「死の受容あるいは否定」、「死後のイメージ（死後の世界観）」、「死を対処する能力」などが該当する。

若年層に於いては①の「メディアからの情報」が死のイメージ形成に大きな役割を担っていることが丹下ら（2002）によって指摘されている[29)]。現代若年層に於いて多く連想された死に纏わる経験は、事件や事故、自殺などのマスメディアを通して伝えられた具体的な死、それも多くが悲劇的な死についてであった。現代若年層の持つ「死に纏わる経験」はメディアを通して得られる第三者の死や死に方・死の原因・事件としての死に偏っていると言える。

②の「宗教や文化」は言葉や慣習で直接的に、死をどのように捉えるかということを示すものでもある[6)20)28)]。例えば仏教では死を人の苦しみの最も大きなものの１つと捉えている。また人は死後に輪廻転生あるいは成仏すると考える。キリスト教では死後、地獄もしくは天国に行くと考えられている。各宗教の信者は教義に基づく宗教的儀礼により死を弔い、日常生活に於ける慣習として身近な死者について想起する。宗教を否定する立場としての無宗教の場合も、その文化的価値観が死を“無”と捉える認知的枠組みを個人に与えている可能性がある。また、宗教を否定しない立場からの無宗教であっても、墓や神社で自然に手を合わせるなどの宗教的感情を否定しないということにつながっていると言えよう。

③の「自分自身の死への直面」については当初の死生学研究に於いて中心テーマとして扱われてきた[3)7)9)]。死の受容プロセスを提唱したキューブラー・ロスは自分自身の死に対する受容のプロセスを経て最終段階に行き着くことで、人間が精神的に成長することを明らかにした[9)]。また、ターミナルケアなどに於いてデス・エデュケーションを実施することは当事者の死への恐怖感を軽減するとともに、残りの時間をより有意義に過ごすことに役立つことが分かっている[3)]。

④の「身近な人の死」について渡邉ら（2006）は近親者を亡くした人への面接調査から分析して

いる[53]。その研究によると、近親者との死別を経験することにより当事者は死について考えるようになり、今後の生き方についても考えるようになる。また、故人との関係性を再認識するとともに、故人の肉体は無くなっても精神は存続し続けるという感覚を持つようになる。続いて、人間はひとりで生きているのではなく周囲に支えられて生きているという他者一般との関係性の再確認がなされる。他の研究には近親者の死後、他者の気持ちを理解できるようになったとする報告もある[3]。渡邉ら（2006）の調査対象者は40~70代の中高年であったが、若年者はどのように他者の死を受けとっているのであろうか。次章に於いて、身近な人との死別経験が現代若年層の死生観にどのような影響を与えるかについて検討する。

⑶ 死後の世界観が認知的枠組みに与える影響

死後の世界観が個人の認知的枠組みに影響を与えるということはいつくかの統計学的研究によって明らかにされてきた[19][30][41]。Bradshaw & Ellison（2010）によると、「死後の世界を信じること」は、現世をより大きな見取り図の中に見出す認知的枠組みを提供する[41]。具体的には、命を現世だけでは終わらないものとみなさせるような認知的枠組みを提供する。現世を来世の前段階とする認識をもつことで、現世での健康や経済的困難などのストレッサーも取るに足らないものであるとする再解釈を与える。その結果、精神的安定感の高まりや不安感の軽減をもたらすことも明らかにされている[23][41]。また、宗教性が様々なストレッサーに直面した際に情緒的コーピングを提供するという研究もある[10][11][12]。「死後の世界を信じること」がコーピングとなる要因は２つあるとされる。「死後の世界を信じることによって死をより望ましいものと再評価できるようになること」と、「死後の世界を信じることが宗教的信念の重要な一部分をなしており様々な宗教的コーピングに触れる機会を増加させること」である[23][41]。このように「死後の世界を信じること」のストレス緩衝効果は多くの先行研究から既に明らかにされている。また、Ellison（2009）は、アメリカの全国調査データの分析から、死後の世界を信じている者は不安感が低く、生活満足度や精神的安定感が高いことを報告している[10]。同様の調査データ分析からFlannelly（2006、2008）は、死後の世界を信じている人は不安感、抑鬱感、強迫観、妄想、恐怖感、自己防衛が低いことを指摘している[42][43]。Ellison（2010）による1998年のGeneral Social Surveyの分析においても、「死後の世界を信じること」はディストレスを低下させるとともに、客観的・主観的収入が低い人に対してストレス緩衝効果をもつことを報告している[41]。国内においても金児暁嗣（1994）や寺沢・横山（2014）、中村・井上（2001）において「死後の世界を信じること」が幸福感の大きさやストレス緩衝効果と有意に関連していることが明らかにされている[16][30][34]。

中村ら（2001）は、死後の世界観が個人の生き方意識や幸福感に与えている影響について量的調査を行い、回収データの相関分析結果をもとに考察している[34]。この調査で、中村ら（2001）は、死生観と幸福感の間に直接の関連性が見られなかったものの、死後存続概念を持つことが自己中心的な生き方意識と負の相関を持っていることを明らかにしている。自己中心的生き方意識があらゆる満足感を低下させることで結果的に幸福感が低下する。また、死に対する経験が死後存続概念を持つことと正相関の関係にあり、生の肯定的イメージが死後存続概念を持つことと正相関の関係にあることが明らかとなった。

２.「死」に纏わる経験と幸福観の関連について
―若年無宗教者へのインタビューから

前章では、種々先行研究に於いて死生観の要素として取り上げられてきた項目を死のインパクトとしての「死に纏わる経験」とその結果としての「死後のイメージや死への態度」とに分類し、各々について先行研究が明らかにしていることを述べた。

本章では前章で取り上げた４つの「死に纏わる経験」のうち「身近な他者の死」が死後のイメージにどのような影響を与えるかについて明らかにすることを目的に、独自に実施したインタビュー調査の結果を考察する。インタビュー対象者の死生観や幸福観に関する語りを対象者の死に纏わる

経験と照らし合わせながら考察する。本調査では無宗教の若年女性２名を対象にインタビュー調査を実施することとした。対象者のうち１名は近親者（母親）の死の経験者、もう１名は未経験者から選定した。

⑴　研究概要

2018年６月15日から７月５日にかけて、関西在住の20代女性を対象にインタビュー調査を行った。

ａ．調査対象者のプロフィール

①　Ｓさん

25歳の女性で、30歳の姉と32歳の兄を持つ。関西の某私立大学大学院の生物学研究室で染色体に関する研究を行っており、来春より企業の研究機関に就職予定。物心がついたころから現在に至るまで父親は単身赴任をしており、現在は兄・姉が独立したことから、父方祖母と２人暮らしをしている。

中学３年の頃に同居の実母を亡くし、23歳の頃には同居の父方祖父を亡くしている。

②　Ｍさん

25歳の女性で、29歳の姉を持つ。関西の某不動産会社に勤務しており、人事部で社員教育等の業務を担当している。父母・姉と同居をしていたが、入社から１年が経過した２年前より１人暮らしをしている。

小学生の時に父方祖母を亡くしているが、元来交流が乏しく「近しい人」として認識していなかったため、その死についてショックを受けた記憶を持っていない。

⑵　調査方法

これまでの人生を振り返って幸福感の浮沈図（写真１，２）を記入してもらい、その図をもとに対象者の死後のイメージや幸福観について話を進めた。

⑶　調査結果

ａ．Ｓさんの事例

①　幸福感

Ｓさんは大学で生物学の研究に勤しんでおり、ほぼ休みなく大学で顕微鏡を覗き込む生活を送っている。お酒を飲んだり美味しいものを食べたりすることが幸せだと話す。彼女自身が研究者として活躍している姿を想像してそれを多忙な活動の活力としているとのこと。

②　母の死と生活の変容

Ｓさんの幸福感の浮沈図（写真１）を見ると、中学入学以降の幸福感が高く、その後急激に低下している。中学時Ｓさんは所属していたコーラス部の活動に打ち込み充実した学生生活を送っていた。しかし、中学３年の冬に母親を亡くしたため幸福感が大きく損なわれたことがわかる。母親が亡くなった時の状況についてＳさんは次のように語った。

「ある日突然くも膜下出血で倒れて、それでまあ、かろうじて一命はとりとめたけど、人工の…なんて言うんやろあの機械つけてないと、息とかできないみたいな状態になっちゃってて。で、お父さんとかとも話して、まあそんな機械で無理やり蘇生するよりかは、もう目覚ます可能性結構低いって言われてたから、機械で無理やり生かすんやったらいっそのこと楽にしてしまった方がいいんじゃないかーってなって。」

Ｓさんは15歳という若さで自身の母親の死に直面した。脳死状態になった母親を延命させるか否かについて、父親や姉、兄とともに話し合い、延命処置をしない決断を下すという経験をした。

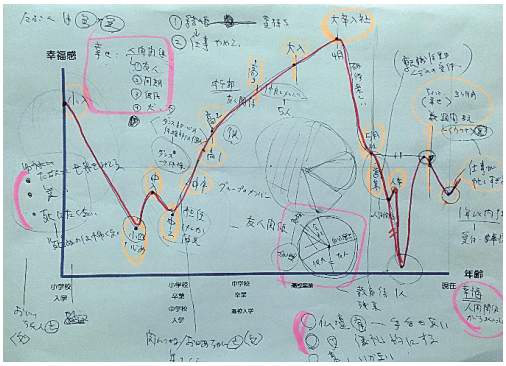

写真１．　Ｓさんの幸福間の浮沈図

③　死後のイメージの二面性

Sさんは無宗教であると自認しており、自宅にある仏壇に対しても“手を合わせる”などの宗教的行為について「あんまり意味を感じない」とし、仏壇に仏教的世界観のイメージを持っていない。しかし、仏壇に意識を傾ける瞬間を自覚しており、外出する際などには仏壇の写真に「一瞬目を向けて」いるという。

また、母親は今どこにいるというイメージを持っているかと尋ねると以下のように語った。

「なんか悪いこととか全部見られてる気がする。自分が実際死んだら、何も無くなって、無になって欲しいと思うけど、なんか、なんか…亡くなった自分の大切な人には悪いこととかがばれてる気がする。」

彼女は亡くなった母親と祖父に「見られている」という感覚を持っており、特に彼女自身にやましいような気持ちがあるときに「ばれている」と感じている。

一方、自分自身の死後はどのようになるかという質問に対しては次のように語っている。

「…死んだあと、お母さんとかは、なんか、その、『いる』と思うって言ったけど、でも自分は、自分が死んだら、いなくなると思う。」
「自分だけが、自分の中からパッっと…世界はそのままで自分だけが無になる」

彼女は特定の宗教に基づいた世界観や価値観を持っていないが、死後のイメージを持っている。それは自分の死においては“無”である。一方近親者の死においては「自分を見ている」というイメージであり、後者では現世とのかかわりを否定していない。

④　まとめ

思春期において実母を亡くし近年では同居の祖父を亡くしたSさんの死後イメージは、Sさん自身とSさん以外の近親者の死で異なっていた。Sさん自身は死後“無”であるというイメージを持っているのに対し、Sさん以外の近親者の死後についてはSさんを「見ている」というイメージを持っている。いずれにしてもそれらは特定の宗教の世界観に依拠するものではなく、Sさんは独自の死後イメージを構築している。

Sさんは自身の生活の中心となっている研究がうまくいかないときには落ち込むこともあるが、将来の目標に向けて日々努力を重ねている。その生活の中で“美味しいものを食べるとき”にささやかな幸せを感じている。

次の事例はSさんと同年齢の不動産会社に勤務する女性Mさんである。

b．Mさんの事例

①　幸福感

Mさんの描いた幸福の浮沈図（写真2）をみると、現在の幸福感は少し落ち込んでいる。現在よりも少し前の時点では僅かに幸福感が大きくなっているが、その直前では幸福感はさらに落ち込み、これまでの経験の中で最も小さな幸福感となっている。この原因は当時の仕事が激務であったことに加え人間関係が良好でなく、職場で彼女自身についての悪い噂を流されてしまったことであった。

彼女は最も幸福感が大きかった大学生活について次のように語っている。

「大学楽しかった！　自由で。やっぱりそこも人間関係が大きくて、交友関係が広くなって、仲の

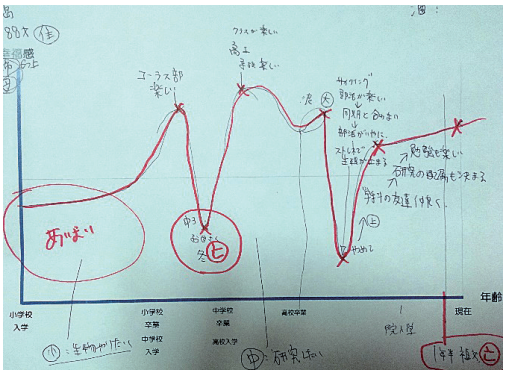

写真2．Mさんの幸福の浮沈図

いい友達でも、違うサークルに入ってたり違うバイトしてたり、取ってる授業も違うから、仲良いけど、ずっと一緒にいなくて。普段は遊んでるけどテスト前は勉強もちょっとはするし、なんか充実してる感じがしたなあ。彼氏もいて、バイトもして、遊んで部活も行って、時間も自由で…。戻りたい大学時代に（笑）」

Mさんはその時々を心地よく過ごすことによって幸福感を得ているが、インタビューの中で度々、人間関係が彼女自身の幸福感に於いて重要であると述べている。しかし、Mさんは近しい人との関係性を特別重視していない。重要視している人間関係についてMさんは以下のように述べている。

「仕事のことで助けてくれる同期とかの方が大事にしなあかんと思ってるし、社会人になる前でもバイト先の人たちより彼氏の優先順位は下やった。まあ彼氏って気を遣わんでいいからっていうのもある。そのほかの人たちって、自分がその人たちにどう思われるかで自分の生活が変わっちゃうやんか。たとえば、学校で独りぼっちになっちゃったら寂しいし、仕事先の人に嫌われたりしたら楽しく仕事できひんし、とか。でも、彼氏って居ひんくなったら居ひんくなったで、その彼氏ひとりだけのことやんか、って思う。」

彼女は関係性が希薄、あるいは短期的であっても、ある時点において一緒に時間を過ごす関係性や、協力し合うことのできる関係性を重視し、このような関係は家族や恋人などの長期的かつ親密な関係以上に優先して大事にしなければならないと考えている。

また、現在の日常生活において最も重要であると感じる時間を次のように述べている。

「美容院に行ったりとか、ネイル行ったりとかは大事。そういう時間がないと無理かな。別に欲しいものがめっちゃあるってわけじゃないけど、自分磨きとか自分のためにお金を使ったりとかして、ちゃんと「自分充実してるな」「自分楽しんでるな」って思いたい。」

Mさんにとって幸福感が大きい状態は自身の生活する時間のそれぞれを楽しむことが出来ている状態であることがわかる。

② 死の経験

Mさんは近しい関係にある人の死を経験していない。父方祖母にあたる人を亡くしてはいるが、故人を「あまり知らない人」と認識しており、当時について特別悲しい思いをしたりショックを受けたりした記憶を持っていない。

③ 死後のイメージの二面性

Mさんは寺社仏閣に対する敬意や宗教儀礼を神聖なものとする感情は「ない」と明言したが、神社で柏手を打つ際には、頭の中で願い事とともに自身の名前と住所まで唱えているという。

身近に感じている人の死を経験したことがない彼女は彼女自身の死後のイメージについて「私は（現世を）ふんわり漂ってそう。」と述べた。一方、彼女の身近な人は死後に「“無”になってる気がする」と述べた。

④ まとめ

これまで近親者の死を経験したことがないMさんの死後イメージは、Mさん自身とMさん以外の近親者の死後イメージで異なっている。Mさん自身は死後「（現世を）漂って」いるイメージを持っているのに対し、自分以外の近しい人の死後は“無”であるというイメージを持っている。MさんもSさん同様特定の宗教の世界観には依拠しない死後イメージを持っていることが分かった。

Mさんは自身の生活が「充実している」ことが彼女自身の幸福感を大きくすると述べており、その生活において重視する人間関係についてもMさん自身の生活が円滑化することや楽しい時間を過ごすことにつながる関係を「大事にしないといけない」と考えている。長期的な付き合いがある人との関係や恋人など親密な付き合いがある人との関係を特に重要視しないことは特筆に値す

る。職場などMさんが日常生活の多くの時間を一緒に過ごす人との関係を重要視しており、恋人関係についてはMさん自身の生活に大きく影響しないものと捉えている。

⑷ インタビュー考察

本調査では、無宗教と自認する若年女性の死後イメージが対象者自身の死と対象者の近親者の死とで異なっていることが明らかとなった。Sさんは自身の死後については“無”であり近親者の死についてはSさん自身を「見ている」存在としてイメージしていた。これに対し、MさんはMさん自身の死後は現世に「漂っている」としMさん以外の近親者については“無”であるとイメージしている。両者の死後イメージはともに二面性を持ちながら“無”と「現世を眺める存在」のイメージが「自己」と「近しい他者」とでねじれている。身近な人との死別を経験することで死後も精神が存続するという観念を持つようになるという結果は中村ら（2001）の量的研究の結果[34]や渡邉ら（2006）の質的研究の結果[53]と一致する。死に纏わる経験の後に形成される身近な人の死後のイメージと自分自身の死後のイメージは必ずしも同一ではないことが明らかとなった。2事例のうち母親という極めて身近な人の死を経験したSさんのみが、故人の死後も精神が存続するという観念を持つに至っていた。また、両者の幸福観にも大きな相違が認められた。これはそれぞれの死に纏わる経験後に形成された死生観から影響を受けていると考えられる。自らは死後“無”になるとした一方で近しい人については死後「自分を見ている存在」となるイメージを持っているSさんの事例では、現時点の努力や日々の失敗が将来的な成功や目標の達成につながるという価値観が形成されており、幸福の浮沈にはこのような長期的目標に達しているかどうかが大きくかかわっている。母親という大変近しい存在、「自分を見ている存在」がSさん自身に俯瞰的視座を与えていることがわかる。また彼女の幸福感に関わる人間関係とは同じ目的を持ちながら長期間共に歩むことのできる関係性であり、表面的な関係を良好に保つこと自体については副次的なものに捉えられているようである。

Sさんとは逆に、自らは「漂っている」が、近しい人は死後“無”であるという死後イメージを持っているMさんの事例では、Mさんがその時点において「充実している」と感じることが幸福感に大きく寄与していた。Mさんは人間関係が良好であることを重視していると語ったが、その人間関係の考え方はSさんとは大きく異なる。Mさんは、一般的に他よりも“密”で長期的な付き合いを想定する恋人との関係よりも、学校や職場の不特定の人たちとの関係（しかも親交の度合いをまったく考慮しない）を優先していた。その理由として、恋人など一対一の関係が悪くなることの弊害はその相手との時間が楽しいものでなくなるだけであることに対し、学友や同僚との関係が悪化することは、自身の生活を楽しくないものとし、また自分の勉強や仕事を円滑にするための協力を得られない点で弊害が圧倒的に大きいからであると語った。彼女は、付き合いの長さや深さに関係なく、その時点での彼女の生活をより楽しく円滑なものにさせる人間関係のコンサマトリーな充足度を重視していることがわかる。

片桐（2009）は現代若年層の価値観について、「世の中をよくする」というような社会に対する目標よりも「自由に過ごす」「豊かな生活を築く」「和やかな生活を送る」といった私生活に対する目標を選択することが多いことを示し、「コンサマトリー（自己充足的）」な価値観すなわち身近な幸せを重視することを示している[15]。また、南（2015）は、コンサマトリーな価値観を持つ若者ほど、友人関係に深い内面的関係を求めず煩わしい関係を避けた表面的な楽しさを求める友人関係を希求していることを明らかにしている[50]。

今回のインタビュー調査では、同じ無宗教者でも「死に纏わる経験」後に形成された死後のイメージの違いにより、その後の価値観と幸福観が大きく異なることが示唆された。その際、どの程度近しい人の死を経験したかにより、その後形成される死後のイメージには相違が認められた。

ジャンケレヴィッチ（1978）は人の死を本人の死である「一人称の死」、身近な者の死である「二人称の死」、他者の死である「三人称の死」に分

類した[7]。松島によると「二人称の死」はその供養や葬儀という儀礼を介して信仰の形成に一定の影響を与えている[47]。木村・濱﨑（2020）は現代若年層を対象とした記述統計学的研究において無宗教化がコンサマトリー的価値観の蔓延に影響している可能性について言及した[22]。当該インタビュー調査では思春期において「二人称の死」を経験したＳさんが、同様の経験を持たないＭさんよりも長期的な幸福観を持っていることが示唆された。これは現代若年層に特徴的なコンサマトリー[44]的な幸福観とは対極をなすものである。Ｓさんは特定の宗教への信仰を持ってはいないが、思春期に母という二人称の死を経験したことで木村の云うメメント・モリ[20]が強度を持つ死生観として賦活されたと考えられる。

３．考察

本稿では死生観がどのように扱われてきたかについて整理すべく先行研究をレビューし、これまで並列的に扱われてきた死生観の要素を「死に纏わる経験」とそれによって変化・構築される「死のイメージや死への態度」とに階層的に分類した。死に纏わる経験のうち自らが直面する一人称の死についての経験は個人に自分自身が死ぬことを受容させる。身近な他者の死（二人称の死）は個人に死後のイメージを持たせたり変容させたりする。日本の現代若年層に特徴的なメディア等から見聞きする三人称の死は、個人に事件や事故・自殺などの悲劇的な死のイメージを与え、死への否定的感情や態度を持たせている[29]。

また、死に纏わる経験のうち「身近な人の死」の経験が現代若年層の死後イメージと幸福観にどのような影響を与えるかについて明らかにすべくインタビュー調査を行った。インタビュー対象者のうち身近な他者の死（二人称の死）を経験した者は死後も故人の精神が存続しているというイメージを持つ反面、自分自身の死後については“無”になるとした。二人称の死を経験していないインタビュー対象者は自らの精神が死後存続するというイメージを持つ反面、他者の死後は“無”になるとした。両者の持つ死後イメージにはねじれが認められる。また、前者が身近な故人について抱いている死後のイメージは自分を「見ている」・悪いことをすると「ばれている」というものであり、身近な死者を仏教で語られる仏やキリスト教で語られる神と近しい性質を有する存在としてイメージしていることが窺がわれる。一方後者が自分の死後について持つイメージは現世を「漂っている」というものであり、生きている現在の状態と近い存在として現世に残留していたいという死の否定的側面に縛られている可能性がある。個人が価値観を形成する青年期において二人称の死に纏わる経験を持つことは超越的存在に対する肯定的感覚を持つことにつながっていると考えられる。さらに近しい故人の存在は残された若者に俯瞰的な視座を与えており、結果的に若者の価値観や幸福観をより長期的・安定的なものにしている可能性がある。

現代日本では、古来より死後のイメージを与える存在でもあった宗教の希薄化[32][52]と、死の医療化[35]によって、生活から「死」が遠いものとなっている。特に若年層では、同居の年配者がいないことが多く、地域のコミュニティとの関係も希薄であるため、近しい関係性にある人の死に直面する機会が少ない。

表１は「死に纏わる経験」により死のイメージや死への態度がどのように変化するかをまとめたものである。一人称あるいは二人称の死に直面する機会を比較的多く持つ高齢者に比べ、液晶越しの三人称の死を主たる「死に纏わる経験」として持つ現代若年層は、死に対してより否定的な感情を持つ。このような死生観は結果として短期的で自己充足的な幸福観の形成につながりやすい。木村・濱﨑（2020）は量的研究結果からコンサマトリーな幸福観を持つことが、個人の幸福因子を無用に増やすことにつながると指摘した。多くの幸福因子（同時に不幸因子でもある）を持った結果、日常生活の些末な事柄によって若者の幸福は浮沈しやすくなっている。現代若年層が漠然とした不全感や不幸感を抱いている背景にはそのような幸福の浮動性が関与しているのかもしれない[22]。

若者がより長期的・安定的な幸福観を形成するためには、まず彼らの死生観に着目することが重要であると考えられる。しかし現代日本において、

表１．偶発的「死に纏わる経験」と「死のイメージ」や「死への態度」

死に纏わる経験	→	死のイメージ（死への態度）
メディア等から見聞きする他者の死 （三人称の死）	→	事故、事件、自殺など、 具体的で悲惨な死のイメージの定着 （死への否定的感情や態度）
身近な他者の死 （二人称の死）	→	死後イメージの創出 （身近な他者の死の受容）
自らが直面する死 （一人称の死）	→	プロセスを経て、自身の死の受容 （死への肯定的感情や態度）

出典：「キューブラー・ロス（1969）」[7]「ジャンケレヴィッチ（1978）」[9]「丹下（2002）」[29]「渡邉・岡本（2006）」[53]より著者作成

死は核家族化・高度医療化の影響で我々の生活から隠蔽されたものとなっている。健全な死生観育成のために、現在主に医療教育の中で行われているデス・エデュケーションを義務教育課程で進めることには価値があるだろう。但し講義や実習、プログラムに参加すること等よるデス・エデュケーションには限界がある。デス・エデュケーションは概ね死生学の考えに基づき死への恐怖や否定的な感情を軽減させること、死に関心を持たせること、死について考えることでよりよい生を送ることを目的としている。これまで国内の若年層を対象としたデス・エデュケーションの試行例は様々ある。中学校教育では『100万回生きた猫』の感想文作成・ディスカッションやホスピスへの訪問[26]、少年犯罪の実名公表を題材とした命を見つめる授業[47]、動物の死を取り上げた授業[2]などがある。高校教育では家系図をさかのぼり命のつながりについて考える授業や身近な死の悲観プロセスについて学ぶ授業[45]、ホスピスやターミナルケアの授業[14]、農業高校に於いて鶏を解剖して試食する授業[48]などがある。大学教育では祖先を10代遡る樹形図を描いたり病理解剖や脳死となった人の臓器提供について考えたりするワークの実施[1]や、尊厳死・インフォームドコンセントなど生命倫理に関する講義などがある[21]。これらのデス・エデュケーションにより受講者が死への関心を高めたり、「死ね」「殺す」などの言葉を軽々しく口にしなくなったりすること、抑うつ度が軽減されること等が報告されている[1][45]。

海外では教育課程でデス・エデュケーションを宗教的テーマとして扱う例がある。Morgan（1990）によると、カナダの神学校のうち35.7%がデス・エデュケーションを行っており、そのうち80%は牧師学、30%では宗教学のテーマとして死を扱っていた。ここでは死者の弔いや死後の世界観についても教えている例が報告されている[51]。一方、カナダの医科大学ではターミナルケアや近親者との死別について考える講義が実施されていたものの、死後の世界観については扱われていなかった[51]。我が国の教育現場に於けるデス・エデュケーションでは、海外の先行研究でその効果が重要視され始めている「死後の世界観」や死の宗教的な側面に触れることが稀である。

誰にも必ず訪れる死は、本来我々の生活の中にある当然の出来事である。しかし、現代日本人において死は特別なもののように捉えられている。竹下ら（2001）が看護学生を対象に行った死生観の分析によると、学生らは臨床実習を通して患者の死を経験することにより、生きることが死に近づくことであると捉えるようになった。同時に死への不安感を強めたことが報告されている[27]。大山ら（2003）によると、看取り経験の多い看護職は経験の少ない看護学生と同じように死への不安や恐怖が大きいが、死後の世界観を持っている傾向は看護学生に比べ低かった[13]。現代日本社会に於ける医療現場では、他者の死がメメント・モリの機能を十分に成しておらず、むしろ若い医療従事者に死への恐怖や否定的イメージを与えていることは注目に値する。メディアなどから経験する三人称の死と同じような影響しか持ち得ていないのである。また河合ら（1996）によると、日本人高齢者は欧米人よりも死への不安や恐怖を大きく

持っている[17]。これについて河合らは日本人高齢者が死そのものよりも死ぬ際の苦しみについての恐怖が大きいと推察している。さらに、日本人高齢者が死後の世界を肯定的に評価するのではなく、現世からの回避という意味付けを持つことで死を受け入れる傾向にあることを明らかにしており[17]、日本人が欧米人に比べ死を「生の喪失」と捉えていることが分かる。波平（2005）は日本人の死後のイメージがあいまいである、もしくは全くないことを指摘している[35]。これは、多くの日本人が宗教を否定的に捉えていることと大きな関係があるかもしれない。

例えば宗教と生活・文化が一体となっているイスラームでは、宗教は信じることであると同時に生活をすることである[49]。その生活には、死の意味を提示する宗教が常に存在する。食べ物が身体の栄養となっているように、宗教が精神の栄養になっているという意味でイスラームの人々は宗教を「スピリチュアルフード」と呼ぶ[49]。彼らはもとより信仰している宗教上の神を強く信じており、苦痛や死に対して家族らとともに祈りなどの宗教的儀式を行うケアを実施する。葬儀の際には同性の親族が宗教家とともに遺体の洗浄を行い、礼拝所へ運び込む。礼拝の時間に間に合えば、日々の礼拝のために集まった人々も見知らぬ故人の死に対して祈りを捧げる[49]。宗教が人々の死について考える機会を与えているイスラームの生活では、宗教と生活・文化が一体となり、生と死が一体となっている。

我が国においても歴史的に葬儀は宗教者によって執り行われてきた[35]。しかし近年では宗教的儀式を介さない簡易な告別式を採用する人が増えている。また仏式の葬儀でも日頃の法事や法話で馴染みの僧侶ではなく体裁を整えるために呼んだ初対面の僧侶によって葬儀が執行されることが増えている。カルトブーム[24][25]以降、日本では宗教に対する偏見や畏怖感情が強くなっていることは否めない。特に若年層における宗教離れは著しい。宗教の希薄な環境下において現行のデス・エデュケーションは生に埋没された死[20]に気づき、生をより大切なものとして捉えるカンフル剤的役割を担いうるかもしれない。

しかし、宗教が媒介することにより本質的に生と死を一体のものとして捉えるメメント・モリと比較するとその効能は必ずしも大きくない。信仰や宗教的儀式を伴わないデス・エデュケーションは死について考える機会となりつつも死をどのように理解するかという問題の解決についてはその答えが用意されていない。また、死について考えることでより生を充実させようとする意識が高まる効果は期待できるが、死を肯定的に捉えることや死後の世界を含めたより長期的な視座で生を捉えることにつながるとは言えない。メメント・モリを惹起する本質的な死の教育を実施するためには、現代日本で失われつつある宗教的アプローチの有効性についてもう一度検討する必要があるかもしれない。

終わりに

現代日本では昨今、有名芸能人の相次ぐ自死が世間を騒がせている。自死のニュースを見聞きすることは、遺族をさらに苦しめ一般の人々に死の否定的イメージや恐怖感を与えるだけでなく、うつ病患者など精神的落ち込みがある者にとって自死を誘発する原因にもなりかねない。マスメディアは死を自然に受容する土壌を持たない多くの日本人に対して自死報道が大きな否定的影響を与えていることを認識し、報道の在り方を熟慮すべきであろう。近年 TV などのマスメディアよりも強い影響力を持ちつつあるインターネットにおいては情報発信者の配慮と利用者側からの情報の選別が必要となると考えられる。

「死に纏わる経験」により人の死のイメージや死への態度は変容する。ことさら二人称の死は経験したものに永続的なメメント・モリと俯瞰的な視座を与え得る。またそのような経験を持たない人にも、これまで伝統的宗教は安定的な死生観と幸福観を提供してきた。今や無宗教者が大多数を占める現代日本において、死を生と一体のものとして捉える文化的価値観を浸透させることは容易ではない。現行のデス・エデュケーションの取り組みには一定の効果が期待できるが、人々が日常生活の中で「死のたしなみ」を自然に身につける為には、風土に根ざした伝統的宗教が再び必要と

なってくるのかもしれない。

本格的な宗教信仰に限らず寺院や神社・教会を訪れその作法に倣って礼拝をすることは宗教に触れ「死のたしなみ」を持つことにつながる。食前に合掌をして「いただきます」と口にすることや正月に初詣に行くこと、墓参りをすることなどは多くの日本人にとって身近な行為である。これらを家庭や学校で単なるマナーや風習として教えるのではなく、その背後に宗教的意味付けがあるということを伝えていくことも重要であると考える。この点において、教育機関における宗教的アプローチの効果は再考の価値があるだろう。宗教教育は宗教的作法の実践から始まり、最終的には人生を俯瞰する宗教的視座を学生に与える機会を持っている。宗教を失いつつある現代日本社会において、伝統的な宗教教育が若者の死生観と幸福観の育成に果たしうる役割について今後さらに検討していきたい。

〈参考文献表〉

1）赤澤正人，辻本寛和（2003）「デスエデュケーションが及ぼす効果に関する研究～施策プログラムによる介入実験を通して～」『臨床死生学年報　大阪大学大学院人間大学　研究科　人間行動学講座　臨床死生学研究分野』8：2－14.

2）天野幸輔（2004）「中学校授業における命の教育―ペット・動物の死をめぐる実践から「授業者の留意点」を考える―」『ターミナルケア　青海社』14(3)：198－291.

3）アルフォンス・デーケン（1986）『死への準備教育の意義：生涯教育として捉える死への準備教育一巻　死を教える』メヂカルフレンド社.

4）井上俊（1973）『死にがいの喪失』筑摩書房.

5）Wong PTP, Recker GT, Gerrser G. Edited by Neimeyar RA.（1994）"The Death Attitude Profile Revised : A Multidimensional Measure of Attitudes Toward Death". *Death Anxiety Handbook: Reseach Instrumentation and Application*, 121－149.

6）宇都宮輝夫（2015）『生と死を考える―宗教学から見た死生観』北海道大学出版社.

7）ウラジーミル・ジャンケレヴィッチ, 仲澤紀雄（訳）（1978）『死』みすず書房.

8）エリクソン，E.H，小此木啓吾（訳編）（1973）『自我同一性―アイデンティティとライフサイクル』誠信書房.

9）エリザベス キューブラー・ロス（1969年）『死ぬ瞬間』中央公論新社.

10）Ellison, Christopher（1991）"Religious Involvement and Subjective Well-being." *Journal of Health and Social Behavior*, 32（80）: 80－99.

11）Ellison, Christopher and David Gay（1990）"Region, Religious Commitment, and Life Satisfaction among Black Americans." *Sociological Quarterly*, 31: 123－147.

12）Ellison, Christopher G., David A. Gay, and Thomas A. Glass（1989）"Does Religious Commitment Contribute to Individual Life Satisfaction?" *Social Forces*, 68: 100－123.

13）大山由美子，沖野良枝（2003）「看護職と看護学生の死生観の傾向に関する比較研究」『日本看護学会論文集』34：75－77.

14）影山由利（2005）「工業系高専への「生と死の教育」出前授業の試み」『教育と医学』：53(6)546－553.

15）片桐新自（2009）『不安定社会の中の若者たち―大学生調査からみるこの20年』世界思想社.

16）金児暁嗣（1994）「大学生とその両親の死の不安と死観」『大阪市立大学文学部紀要人文研究』46：1－28.

17）河合千恵子，下仲淳子，中里克治（1996）「老年期における死に対する態度」『老年社会科学』17：107－116.

18）川喜田二郎（1967）『発想法―創造性開発のために』中公新書.

19）木村敏（1987）「宗教の隠蔽と開示」『現代思想』15(2)：82－90.

20）木村敏（2012）「メメント・モリ」『文明と哲学』4：32－42.

21）木村正治（1989）「大学生を対象にした「死の教育」（Death Education）の実践とその評価」『学校保健研究』32(9)：443－450.

22）木村優里，濱﨑由紀子（2020）「宗教と主観的幸福感について―死の忘却とコンサマトリー化する現代―」『京都女子大学大学院現代社会研究科紀要』14：127－136.

23）Schieman Scott.（2011）"Religious Beliefs and Mental Health: Applications and Extensions of the Stress Process Model." Handbook of Mental Health and Mental Disorders: *Perspectives from Social Science.* : 179－201.

24）大宮司信（1994）「宗教と精神保健」『臨床精神医学』23(7)：725－728.

25）大宮司信（1998）「大学生と宗教」『精神科治療学』13(3)：305－310.

26）高橋和久（2005）「「生と死の教育」に関する実践

的研究～総合的な学習の時間におけるデス・エデュケーションの取り組みを通して」『道徳と教育』49：5－14.

27）竹下美恵子，魚住郁子，渡辺弥生（2001）「看護学生の死生観に関する研究（第3報）領域別臨地実習前後の比較」『日本看護学会論文集』32：76－78.

28）棚次正和、山中弘（2005）『宗教学入門』ミネルヴァ書房.

29）丹下智香子（2002）「「死」からの連想語のKJ法による分類―死生観の構造の検討―」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要』49：157－168.

30）寺沢重法，横山忠範（2014）「死後の世界を信じることと幸福感― JGSS-2008の分析」『宗教と社会貢献』10(4)：1－25.

31）Templer DA.（1970）"The construction and validation of a Death Anxiety Scale" *General Psychology*, 82: 165－177.

32）統計数理研究所『日本人の国民性調査』（2020年10月10日閲覧）https://www.ism.ac.jp/kokuminsei/table/data/html/ss3/3_1/3_1_20132.htm

33）中出佳操（2004）「生涯学習における命の教育実践と評価に関する一考察」『生涯学習研究と実践』6：129－139.

34）中村雅彦，井上美穂（2001）「死生観が心理的幸福感に及ぼす影響」『愛媛大学教育学部紀要』47(2)：59－99.

35）波平恵美子（2005）「死の「成立」、死体の処分、死者の祭祀をめぐる慣習と法的環境の齟齬」『法社会学』62：19－30.

36）人見裕江，塚原貴子，宮原伸二，菊井和子，小柴順子，中西啓子，影本妙子，近藤功行，柳碑文谷創（2003）『死に方を忘れた日本人』大東出版.

37）ビハーラ医療団編（2012）『ビハーラ医療団―学びと実践―』自照社出版.

38）平井啓，坂口幸弘，安部幸志，森川優子，柏木哲夫（2000）「死生観に関する研究―死生観尺度の構成と信頼性・妥当性の検証」『死の臨床』23：1.

39）藤井美和（2015）『死生学とQOL』関西学院大学出版会.

40）藤本欣也，本多妙（2003）「Death Competencyの構造と尺度作成」『臨床死生学年報　大阪大学大学院人間科学　研究科　人間行動学講座　臨床死生学研究分野』8：15－29.

41）Flannelly KJ, Kenig HG, Ellison CG, Galek K, Krause N.（2006）"Belief in Life after Death and Mental Health: Findings from a National Survey," *Nervous and Mental Disease* 194: 524－529.

42）Flannelly KJ, Ellison CG, Galek K, Kenig HG.（2008）"Beliefs about Life-after-death, Psychiatric Symptomology and Cognitive Theories of Psychopathology." *Psychology and Theology* 36: 94－103.

43）古市憲寿（2013）「日本の「若者」はこれからも幸せか」『アスティオン』79：88－102.

44）古田晴彦（2005）「高等教育における「生と死の教育」（特集　生と死の教育）」『教育と医学』53：6. 530－537.

45）松島公望（研究代表）（2015）「スピリチュアリティと精神的健康の関連―苦難への対処に関する実証的研究（科学研究費補助金基盤研究B宗教性/2012~2014年度　研究課題番号：24330185）」『東京大学駒場学生相談所　研究成果報告書』：1－86.

46）松野卓郎（2005）「命をいつ目、生き方を問う道徳指導―「わたしの命　あなたの命」の実践を通して―」『道徳と教育』49：15－27.

47）真鍋公士（2005）「農業高校での「命の教育」」『教育と医学』53：554－563.

48）三岡肖江（1995）「医療における宗教の果たす役割」『静岡県立大学短期大学部研究紀要』9：75－79.

49）南学（2015）「現代の若者の価値観と主観的幸福の検討」『三重大学教育学部研究紀要』66：171－178.

50）Morgan John（1990）"Death Education in Canada. King's College", *Ontario*, 266.

51）山口和孝（1998）「戦後の宗教と教育をめぐる争点と課題」『教育学研究』65(4)：32.

52）渡邉照美，岡本祐子（2006）「身近な他者との死別を通した人格的発達―がんで近親者を亡くされた方への面接調査から」『質的心理学研究』5(5)：99－120.

About the relationship between the experience of death and the view of well-being From the perspective of religion and the view of life and death in the modern youth

KIMURA Yuri

〈Abstract〉

Suicide has been the leading cause of death for young people in Japan for several years, and it is becoming increasingly important for young people today to think about "death." The field of thanatology has adopted the idea of enriching life by seeing death, starting with end-of-life care. Today, the concept of death education is gradually spreading to the general public, and there are some attempts to embed it in the education curriculum. However, existing death education programs are only aimed at helping students think about death and thereby recognize the value of life. Few previous studies have shown how "death-related experiences" affect an individual's cognitive framework.

This paper first reviews the literature of the thanatology. The various items that have been treated in parallel as elements of the "view of life and death" in previous studies are classified into "death-related experiences" and "image of death/attitude toward death" hierarchically. We considered how the "death-related experience" would affect an individual's "image of death/attitude toward death." Next, an interview survey was conducted to clarify how the "image of death/attitude toward death" contributes to an individual's view of well-being. In this interview, we analyzed the influence of "the death of others close to us" among the "experiences related to death" on the individual's view of well-being from the perspective of life and death. We examined the possibility that the death-related experience just like religious beliefs and cultural values transformed an individual's view of life and death, and as a result, affected the view of well-being.

Key words：view of life and death, view of well-being, Religion, image after death, the experience of death, mement mori